自閉症エコラリアと健常児の音声模倣における自動性と意図

—ジャクソニズムの立場からの考察—

○萱村俊哉¹・萱村朋子²

(¹武庫川女子大学短期大学部・²奈良女子大学大学院人間文化研究科)

キーワード：エコラリア、音声模倣、意図

Automatism versus intention on the autism echolalia and vocal imitation observed in normal children: A consideration from Jacksonistic point of view

Toshiya KAYAMURA¹ and Tomoko KAYAMURA²

(¹Department of Human Relations, Mukogawa Women's Univ. Junior College Division)

(²Graduate School of Human Culture, Nara Women's Univ.)

Key Words: echolalia, vocal imitation, intention

目 的

近年、エコラリア(echolalia)は、自閉症児が他者に対して行うコミュニケーション手段として位置づけられ、それはほぼ一致した見解になりつつある(廣澤・田中,2004)。つまり、エコラリアの中に発話者の意図や意思が含まれているということである。

筆者らは2人の乳幼児の心身の発達と生活について時系列的な観察研究を行っており、その観察経過中、健常児の言語発達においてみられる音声模倣にある種のコミュニケーション機能、あるいはそれを支える機能が存在することを発見した。このことは、自閉症にみられるエコラリアにはコミュニケーション機能が認められるという指摘(たとえば、Prizant, 1983)と同一線上に位置するものようにみえる。したがって今後の課題は、健常児の音声模倣とエコラリアとの異同について明らかにすることと考えられる。そこで本発表では、健常児の音声模倣の神経心理学の中心概念であるジャクソニズム(Jacksonism)を拠り所に、この点について比較検討することを試みた。

方 法

生後約1ヶ月から現在に至るまで2名の乳幼児(Tb児、Ta児。きょうだいとともに男児)の運動、言語、睡眠、食事(授乳を含む)、排便、排尿、着替えなど心身の発達と生活について、母親が時系列的な観察記録(日誌法)を行っており、この観察の中で、Tb児、Ta児それぞれの1歳半前後における音声模倣のエピソードを抽出した。

結 果

日誌の内容を分析した結果、To児は遅延模倣、Ta児は即時模倣を主に採用しており、現象的には2人の言語模倣の間には違いがみられた。To児が即時模倣を、Ta児が遅延模倣を示すことも、もちろん観察されたが、2人が1歳代のときにはそのようなエピソードは比較的少なかったということである。

To児の音声の遅延模倣例とそのときの状況を以下に示す。

授乳の合間に、絵本(ブブちゃん)のなかの、ブブちゃんが溺れかけるシーンのときの読み聞かせのセリフや状況説明のことはよく唐突に口にする。母親がそれに応じた(それに続く)説明をすると、それをよく聞き、「もっと」と言って、その説明の続きをせがむ。この絵本はTo児がお気に入りのもので、父親が普段からよく読みかかせをしていた。

次に、Ta児の、言語の即時模倣例を示す。

【例1】 食事において母親がTa児に着席を促している場面

母親「OOちゃん、お椅子に座ろうか」→Ta児「OOちゃん、おいすにすわろうか」→Ta児「おいすにすわる」→Ta児「おいすにすわるよ」

上の例に示したように、このように言語模倣のタイプは2人の間で異なったが、両者ともに「自動的」な模倣に続いて「意図的」な要求や返答が認められた点は共通していた。すなわち、To児は過去に入力されたセリフを脱文脈的に発し(自動的の行為)、それに応じた母親の説明を聞き、さらにそれを促した(意図的の行為)。またTa児は、母親の質問に対し即時模倣(自動的の行為)し、それに続けて自分の要求を正しく返答した(意図的の行為)のである。

考 察

健常児の即時的な音声模倣、あるいは他者の反応を誘発するような音声の延滞模倣では、自分の判断の結果を述べたり、他者の説明を求める(意図的なプロセス)ことと、模倣(自動的なプロセス)の間に「競合」が発生し、意図(意思)が、本人自身まだ不明確な場合に、意図的なプロセスよりも自動的なプロセスが先行し、それが意図的なプロセスの生起をリリースしていると解釈される。

一方、自閉症エコラリアも相手の問いを自動的に模倣する点は健常児の音声模倣と同じである。しかし、健常児ではそれに続き、意図的発話がみられたり、他者の説明を促したりすることが多いのに対し、自閉症エコラリアではそのような後続の意図的反応が認められない。つまり自閉症エコラリアは、自動的なプロセスが賦活化されても、それに伴って意図的なプロセスが十分に賦活化されない現象であると説明することも可能だろう。

自閉症エコラリアをジャクソニズムの観点から説明すると、低次の自動的なプロセスが賦活化され、エコラリアが発生しても、それが意図的なプロセスの形成に寄与しないが、自動的なプロセスであるエコラリア自体はコミュニケーション手段として独自の発達の変化を遂げ、さまざまなコミュニケーション機能あるいはそれを支持する機能を獲得するようになったのではないかと推測される。

引用文献

廣澤 満之・田中 真理(2004). 自閉性障害児における即時性エコラリアに関する研究の展望 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 52, 249-259.

Prizant, B. M. (1983). Language acquisition and communicative behavior in autism: Toward an understanding of the "whole" of it. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 13, 365-381.